当時からの古文書に徴するに、旧岩国藩領内（玖珂郡の大部分）の村々が宮に協力して維持されたのであるから、郡内総体で此の祭りを執行せんとしたのである、著者は其の時「錦帶橋祭の意義」という小冊子を印刷して之を頒布すると共にたまたま開かれた郡内町村長集会の席に提出して其の賛同を求めた、別の章に記したように、旧藩時代此の橋維持の為に城下には士族は各々其の石高に依り、商家や農民、寺院にも分に応じて特別課税があつたが、山代組、河内組、由宇組、柳井組、久可組（玖珂町）等藩内地域割に人役と供米が課せられてあつたので、其の歴史に省りみ協力せんことを求めたのであつた、十一月三日の当日は錦帶橋下に荘厳なる祭壇を設けて祝詞（のりと）、祭文が誦み上げられ橋靈に告げられた。祭事に伴うていろいろの催うしが行われ郡内物産陳列場、各村諸芸のコンクール、素人相撲、競馬、剣道柔道、大掛りの大名行列、夜は絶え間なく打上ぐる花火の中を橋欄に引渡されたるイルミネーションは燦爛として、時ならぬ七彩の虹を描き、近郷近在から又他郡から来集する群衆は一日数万に及び、警察官や消防組、少年隊は交通整理に当るなど、岩国あつて以来の盛観であつた、此の祭事は以後毎年此の日を以て行う計画により創始せられたのであるが、其の翌年から日支事変が勃発して世上騒がしき為に、型ばかりの内祭に止むること両三年にして、其れすら行えぬようになり、太平洋戦争と共に遂に見送りとなつて今日に及んだ。是亦た錦帶橋史の一色彩であるから、将来再興せられんことを期待する。

第十章　昭和二十五年落橋の大事変並に再建

一、落橋沉失の瞬間を実見した人の話

突如として発生したる昭和二十五年九月十四日午前九時四十七分、岩国市を貫流する錦川は錦にあらぬ濁流の滔々たる

上を、俄然として次ぎから次ぎと崩落していつた五龍の姿、驚愕の眼を見張つた沿岸の市民、手もて救う能わず叫びを以て支うる能わず、瞬く間に四分五裂、二百七十七年間、嚴然偉容を誇つた我れら最愛の錦帶橋は渦卷く怒浪の中へ忽ちにして呑まれて去つた。

春来多雨であつた周防東部の山嶽地帶に又もや豪雨を伴うキジヤ台風が襲来した、下流の水嵩は刻々に増して両岸を嚙んでゆく、菱形橋台の上流向き尖角は、押し来る激流と闘つて之を切破り挑ね返し夜半より曉明に懸命の戦いを連続した偉大なる構想家吉川広嘉、及び水の性質を能く弁えて、巧妙なる工作を構えた湯淺七右衞門及び其の一党の築造に係る橋台は、延宝の昔、水の流れの各方向に隨うて、其の向きを異にし成るべく流水に逆わぬよう鎭座して流れを受けていた、けれども洪水量の次第に嵩上するに及べば遂に彼れと戦わざるを得まい、午前八時頃には其の半身以上を浸された、渦卷く激流濁波と戦うさまは、恰も百万の大兵に取囲まれ、孤軍奮闘する勇士の壯烈な血みどろの姿を、片唾を飲んで眺むるようである。又もや水嵩の増したかと思う瞬間の九時四十五分天日猶暗く雲霧漠々水鳴り山響く中を、性根尽きたか壯烈なる戦はあわれ幾重橋台築石の敗軍となり、湯淺七右衞門、児玉九郎右衞門の魂魄の血の塊は、黄に濁つた敵軍の渦まく中へ次ぎ次ぎと飛沫となつて散つた、聞ゆるものは憎く〳〵しくも轟々たる激流の凱歌である。

其の日の朝は出水見物の市民がいつもの出水の時のように、東寄りの橋本に集つて刻々に嵩む濁流を眺めている、此の数十人の者どもはよもや千古不落を誇る此の橋が三時間の内に崩落しようとは、其れの内の誰れも予想しなかつたことである。いつも橋辺に在りて観光客を相手に撮影を業とする此の町の写真師小川助一君は、午前八時というに早くも橋頭に機を操つて、洪水と戦う橋の撮影にレンズを向け気を配つていた、四、五枚も撮つて九時三十分頃、折柄既に交通止めとなつていた橋を渡り、西寄りの横山に位置を替え此の方面から写さんとして狙いを定めていると突如一大異変が眼前に突発した

のである。此時消防隊は出水期の例に依つて警戒地に就いていたが、一同須波と言う間に、中央の二反り橋が濁流に落ちて碎けた小川写真師は驚愕のあまりシヤツターすることを逸して茫然と立つていた、君は其の時の模様を下の如く語る。

『私は墜落十五分前に渡橋しましたが其の時はまだ何事もなく橋下は濁流が激しく橋台を渦巻きつつ波立つていました私より後に消防隊の一人が渡りましたが其の人は墜落僅に三、四秒前でしたから一歩遅れたなら橋と共に死んだでありましよう。今から思ゞと身の毛もよ立つようであります、渡るや否や乗越の方からレンズを向けシヤツターを握つて機を窺つた其の瞬間、忽ちメキ〳〵という音がしました、アラヲと思う間もあらず中央の二つの反り橋が下流に相並んで傾き始めました、此の機を逸せずシヤツターを切るべきでありますが、何んとしたことか私はびつくりして其れすら為す遑なく茫然自失の内に、傾いた橋梁は元に復つて平らに並んだかと思うと、上から押えられるように其のまま相揃うて河中へ沈み、激流に引つくり返されて滅茶々々に碎けバラ〳〵になつて流れてゆきました。話せば長いですが傾斜から墜落まで一、二分を待ちませんでした、驚いて集り来る群衆は唖然として一語を発するものもなかつた其の時の靜寂、私は写真屋としての商売柄、貴重なる資料の墜落瞬間をシヤツターすることを忘れて、其れを握つたまま突立つていたのを発見した時、これはしまつたと始めて気が付いたが已に及ばなかつた、見れば永年私のレンズに入つて堂々たる威容を示し難攻不落を誇り顔にしていた二基の橋台は、総崩れとなつて濁流に沒し忽然として姿を消したのでした、まるで夢見る心地でありました、之を直観する河岸の多くの人々は、憂色に満ちて橋の最期を眺め、頻りに悲憤の言葉を交わしている、此くする内に手早く二、三枚を写して十時二十分頃となると、又も一大音響と共に次の反り橋が恰も上から押伏せらるるように両端を延ばしペチヤンコになつて落ちてしまいました、一基の橋台は既に姿は見えない只だ激浪の跳ね狂うばかりが目に映じました、東寄りの有脚橋と其の橋台、西寄りの有脚橋と其の橋台が、真ん中を切断

され、東西相呼ぶも渡る能わず恨を呑んで半壊の姿を留め居るを遠望して、永い間毎日々々之を友のようにして撮影したその深い関係から、全く商売気を離れて遺恨千秋の涙が胸に溢れました。是より先、消防団長の戸沢さんは団員を指揮し自分も土俵を荷いで橋の上を往復して居つたが、其れは橋台の何処かに穴が空いて水の浸入するのを防ぐ為であつたのではないかと思います、橋台の積石が一つでも脱落すると、其処から激流が侵入して他の石を洗い流すから、早く防がぬと全体が崩れてしまう、多分其の時橋台の上部が中の方へと段々陥没しつつあつたのではあるまいか、戸沢さんが土俵を背負つて運んでいたのは多分其れでありましよう云々』（本書にある墜落前後の写真は概ね小川君の撮影である）

小川君は写真師だけに、其の刻々の変化をレンズに収めると同時に、崩落の状況を観測するに於て普通人よりは一層現実的に語ること精妙である、思うに昭和二十五年九月の錦帯橋墜落を物語るに於て之に過ぎたる現実描写はあるまい、而も其の原因は何であるか、延宝二年五月二十八日出水に災されて墜落流失したその原因が橋台の崩壊に在ると等しく、今度の其れも橋台の欠陥に因るは疑うべくもない。之に就て当日事前から水防に出動していた岩国市消防団長戸沢菊次郎君は下のように語る。

『私は岩国市消防団長として早朝から水防の部署に就き、錦帯橋の保護に横山堤防の上から団員を指揮し万全を期していた、水勢は刻々に高まり激流は橋台の上部へ向けて勢い凄じく渦巻きつつある、其の時、横山から第二橋と第三橋の間に立つ橋台の下流に面する上部の中程に穴が空いて、其れに激流が打込むのを発見したから、驚いて土俵を担ぎ其れを塡めんとしたが、跳る水が激しくなか〳〵追つ付きそうもない、其の場に居合わした市の土木課員に、水中といえども直に凝着するセメントが警察署にあるから急ぎ持来るよう督促したが、其の事速かに運ばれざる内に、水勢は抜けかかつた石台の中へ浸入して洗い流し他の石がまた動き始めたと見えて、あれやという間もあらせず総崩れとなつて激流

に奪い去らるると共に、橋梁が一方は低くく一方は高く傾き忽ちにして中断して二つとなり濁流へ墜落してしまつた。既に此の橋台が崩落してしまえば共持の第三橋も隨つて墜落するばかりか、為に其れを支えた三番目の橋台にも大穴が拔けて築石が崩壞したので、第四橋も時を移さず墜落したが是れは不思議にも直に全部が落ちずに、其の一半が首を低れて水中に沒し後部だけは四番目の橋台の架つたまま止つたので、四番目の橋台は崩落せずに激流に堪え得たのであつた、結局、横山寄りの第一橋台と錦見寄りの第四橋台とは辛うじて其の姿を留むると共に東西両端の有脚橋梁は流失を免れたのである。此く話せば長いけれども、落ち始めて一時間も経たぬ内に、さしも威容の堂々たりし二百八十年間の名橋は夢の如く消えていつたのであつた。此の間私は橋台の崩落を防ぐ為めに団員を指揮し声のかるるまで叫びつづけ眼中他に何物も無かつたので、墜落流失の一々の経過は写実のように詳しく話すことは出来ない、只だ夢中に其のむごたらしい最期を記憶するのみである。人間生涯の中此の如き悲惨にして無限の恨事を経験することは過去に於ても亦将来に於ても有るまいと思う。一瞬にして急変した四辺の光景を眺めて一時茫然としていた、気が付いたのは下流の臥龍橋の事である、急ぎ消防ポンプ自動車を飛ばして駈け付けると、流失の錦帶橋梁が横になつて橋脚へ引つかかり、激流に押されて舞うている、橋は為めに動揺するので通行止めを為しながら其の梁木を除却して放流せしめんと、橋上から気を揉んでいると、勇敢なる青年団員八百谷君がヒラリ欄杆を跨げて橋脚をすべり降り、半身を奔流に浸して引つ掛つた梁材をコネ除けんとするが、僅かに五、六寸の引つかかりであるけれども水の抗力猛烈で人力を以て刎ねのけることが出来ない、濁流中を走り来る無数の砂礫が背部腰部を打つこと乱彈のように堪え兼ね、遂に放棄して脱出した、見れば下半身は砂礫の打撲で真黒くなつていた、元来錦帶橋の流失は橋台築石の弛みから発した、是より先き私は、出水前に其の弛みを認めて速に修覆せんことを津田市長に進言しておいたが、未だ実施に至らざる内に此の出水に遭い大事変

を招いたことは何んと言つても遺憾に堪えません云々』

以上現場に在つた小川写真師と戸沢消防団長との実見談は、其日の落橋模様を知るに於て何よりの史実である。橋の保護について市当局の疎虞もあることなれども、二百七十七年の寿命既に尽きんとする処へ、森林の過伐、砂利の過採、上流ダムの無思慮の開扉等は激流一時に到りて此の惨事を速かならしめたるは爭うべからざる事実である。

二、橋の流失の主たる原因

橋の落失の主たる原因に就て岩国市役所の報告に依れば

『昭和二十五年九月十三日よりキジア台風山口県に襲来し、後より暴風雨となり、岩国市北部各町村より出水増水の徴候の警報を発す、十四日午前二時頃更に激流と變りたる旨の警報に接す、直ちに消防団を錦帯橋保護の任に当らしめ配置を了し午前七時より拱橋部分に古来よりの例に倣い、洪水に際し拱の浮動を防止するため六尺酒樽を拱の上に運び、之れに注水を始め八時半までに終了す、此の時既に増水は激しくなり、橋脚尖端より打ち上げ、橋脚上部方形部まで増水、平水位より六・五米に達し、激流各橋脚に激突し、遂に第三脚上流側尖端上の上層被覆石沈下、大穴洞を生じ始めたるを発見し、直ちに水防団員召集、之れに応急の処置として石詰叺を準備、橋脚上躍り場上に重積して橋桁の浮き上りを防止せんとせしも期至らずして、橋脚後部に同様構造の上部被覆石も落込み、激流は此の間上流部橋脚上部により浸水して第三脚部より崩壊し始め、第三、四橋拱部は午前九時四十七分流失を始め、続いて十一時十分第二橋拱部流失す。』

されぼその墜落は橋台築石中の何処かの一部が激流に刎ねられて離脱したるに因るものと認めらる、是は此の出水に際

して始めて弛緩を生じたるにあらず、平生既に其の禍因の存したるは疑いあるべからず、何となれば以前度々の出水あり而も九月十三、四日の水位よりも尚高きものありしも其の災を招かざりしに、今日却つて此の大事變を来したるは、過去三、四年の間に崩壞の素因を現わしいたるに相違ない。千慮の一失遂に此の回らし難き災禍を生ぜしは返す〳〵も遺憾と言わざるを得ない、当日水防に従事した人の実話と此の点一致するは以て証左とすべきである。

三、橋梁橋材の漂流

偖、て錦帶橋が落ちた！という飛報は直ちに口から口に伝えられて、岩国市民を驚愕の中に投げ込んだ、取るものも取敢えず橋頭両岸に集るもの刻々数を加え、跳梁跋扈する濁流を眼前に見送つて失望と悲哀とは交もゝ〳〵霽れやらぬ雨後の心を曇らせている、著者が之を伝え聞いたのは正午を少し過ぎた頃であつた。著者の住居は錦帶橋を距ること東南一里弱の辺僻の牛野谷部落で、時恰も錦川の溢水で其の分派の門前川は折柄の満潮差し上るのと合して、堤防の樋門から部落内へ逆流し、山下の家々は浸水床下に及び湖水に浮んでいるようになつたから、いずれも防水に忙殺され暫く外部との交通が杜絶されていたので、其れを聞くことが遅かつた、堤防に上つて見ると成程橋梁の破片が濁流の中を浮きつ沈みつ寄せて来る、是れが名勝錦帶橋の刀折れ矢尽きた敗軍の散亡かと思うと、二百七十七年の儼然たる偉観がまざ〳〵と眼に残つて悲しかつた。名君吉川広嘉の事、名匠児玉九郎右衛門、湯浅七右衛門の事など百功碎けて情けなく、誇り顔なる濁流を無残に浮き上つては又沈んでゆく。

其の内に大きな橋梁の一連が半ば碎かれたとはいうものの、沈んで其の遺骸を保ちつつ死せる鯨のように河岸寄りに流れて来た、或は沈み或は浮み顚転反側して苦闘を続け、口あれば助けを呼ぶべく声あらば唸めきもすべき惨憺たる最期の

一瞬を見せつけて下流へと消えて行つた。そもく錦川は流長三十里一川を以て岩国城下を納るが、著者の住居の面前から二分派に別れ、東北は今津川となり、西南は門前川となり、其の中洲に川下部落の広面積な大平野を形成して瀬戸内海へ注流する、けれども上古から流域形成上門前川が其の本流を成しているので、多くの水量は此方に注ぐがために、洪水の場合上流からの木材等の流失物は概ね門前川を下るのである。破壊された橋板、桁、高欄などの残骸や断片が次から次と流れて来て其の内河岸の畑地や付近の海岸へ取残されたのもあるが、余は概ね瀬戸内海へ四散して大嶋郡の浜辺や広島県の島々へ漂流し、漁人や村人の獲物となつたであろう。大自然の暴力に堪え難かりしは已むを得ないとしても、要するに橋の寿命が来ていた処へ、戦時の非常国策が後患を思うの遑なく流域山林の濫伐、バラス採取で河床の異變等が之に加わり、まだ長かるべき生命を奪つたのである。神技鬼工の人造物の二百七十七年が、倒るる時が来ていたと前から知れて居れば曾て其の管理者であつた著者も用意すべきであつたと後悔するが、さりとて其れを打ち壊して新造するには莫大な経費を必要とするから、寧ろ大自然が之を破壊して新建築を命ずるならば、其れ丈け人力と費用が省かれて如何程か便宜であつたかも知れないと、責めてもの諦らめに此うも考えるのである。

四、橋台崩落跡の実見記

其の翌日、著者は早速歩を急がせて橋霊を弔うた、中央の三反りは影形もない、濁流が漲ぎり狂うている。東寄りの有脚橋は中央から折れて橋台の下へ垂れかかり、其の先端は流水を啄んでいる、西寄りの横山地を遠望すると其の有脚橋は依然として旧態を保ち、落ちも流れもしていないが其の橋台の下部には一個の大穴が見える、築石の一つが脱落した痕跡である、なるほど此脱落が流失の分にも起きて其れに激流が侵入した為ではあるまいかと、消防隊が土俵を運んだという

話を想い返す、水位は退いたが猶ほ川一面には濁流が矢の如く走つている、人々は惘々として只だ事後の悔恨談を繰返すのみ。

両三日にして再び行つて観た、既に水は平常に近き程に減じて河原が現われ、崩落した橋台の石塊が大、中、小、累々又散々、精魂尽きて横わり恰も戦死者の屍骸のように在りし日の名残りを留めている、著者の目に着いたのは細く碎かれた割栗石が処隈なく散らばつていることである、青黒い色の中に赤錆を漂わして胎内蟄居以来二百七十七年目の天日に暖められている。其の昔、此の橋台を築くの日、台脚へ封じ込まれ外部の水位と高低する水準を、此の割栗石が其の隙間々々に吸い上げ吸い下ろして、苦労を重ねた其の色！、延宝年代よりこのかた暗黒の中に閉ぢ込められて昭和現代人の前に始めて展開された其れである、其の栗石の一塊を殊更に拾いあげて臭うて見る、裏や表を翻えして其れを頬に当てて、愛着の心に訴える、殷々として万古の声を耳に聴くようである。

「此の石は大事な物であるから整理の時に粗末にしないようにして下さい」

と言うと、現場の監督者は不審そうに

「其れは何ですか」と訊くのである。

「伝来の古文書に依ると、これは栗石といつて橋台の空胎部に特につめ込んだ貴重の役目を果したものである、橋台を築くにはわざ〳〵中身は空にしておいて此の石を入れ、空隙を存しておくと、洪水の時に外部の水位が昇るに隨うて胎内の水位も台底から昇る、水位が下るときは胎内の其れも下る、即ち橋台の内外水位のバランスを保たしめておかないと、如何に大重量の橋台でも、水圧の為に動揺する心配がある、其れが崩壊の一原因となるから湯浅七右衛門は此の用意を施したということだ」

著者も始めて其れを知つたようであつた。

是れにて胎内へ割栗石が詰込んであるという古文書は事実であることが判つた、そこらの大石塊小石塊の顚倒する中に反り橋の跳ね返しを司る「隔石（へたていし）」も、長い間の苦労を如実に現わして転がつている、皆事実であつたが、尙一つの疑問は橋台下に施した基礎工事の「編木」の枠が果して存在するや否であるが、其れは橋台を取払い底部深く掘つて見なければ分明せぬ、今は其の取払いの終るを待つばかりである。

著者は其の後、断えず橋礎の堀上げを検分していたが、古い材木は切れ〴〵に堀上げられ其れが腐蝕されているのを見たけれども、湯淺文書の図面にある編木の形を留めていない、相当大きな長いものもあつた。著者は編木の二百七十余年間水底に埋没して今日始めて日の目を見たのだと認めて尙堀下げを待つていたが、日を経て編木其の物の原形を発見することが出来ない内に、井筒のピアーを其の上に埋築することになつた。処が去七月（昭和二十六年）の霖雨出水の為、ピアーの周囲が激流に堀り返えされて約十尺に及んだ時、其の編木の一端が整然と現われ水底に映つているのを見出した、初めには、編木の図面は設計だけのことで施工の時は図面通りに行わなかつたものであろうと評議区々であつたけれども今や其の実現を見るに至つて、水底深く鞏固に施されたことを確め得たのであつた。

但し茲に不審な事は、割栗石の露出と共に此んな物は無かりそうなものの粘土が、胎内から多量に露われ出たことである、一体栗石は破碎されたままのものであるから、之を胎内に塡充するとも固より其の石塊の間には隙間を生じ、其の隙間に台底から水が上下する仕組みになつているに係らず、此の如き粘土が栗石と一所に詰めてあつては隙間などは有るべき筈なく、殊に粘土であるから浸水には極めて都合の悪い障碍となるであろう、湯淺家古文書を対照して見ても粘土を詰込む仕様書はなく、むしろ其れは正反対に妨げになるように見えるが如何な事であろうか、而も此の粘土は延宝二年建造

の時には介入せざりしものが二百七十余年の間、外部よりいつしか土砂が侵入して隙間を塞いだものではないかと、疑えば疑わるるが而も橋台には土砂の侵入すべき空隙はない筈である、其の実質を試検するに天然の粘土で、此地方には見当らない粘土であるように思わるるから、或は他地方からわざ〳〵運んで来たものではあるまいか、果して然らば必要あつての事であるから、当時の工事者が特に割栗石と共に混封したのではあるまいか、然るときは、胎内の栗石に隙間を与えて胎外の水位と常にバランスを保たしめ、洪水の為に橋台の動揺を防ぐ用意の妙用という古文書に矛盾を生ずる、是は一つの不可解として他の橋台の解体を待つて其の何れが是なるかを判断することにする。

（著者追記）　割栗石を胎内へ塡充の実否につき本書第十章を記すに及びて橋台取崩し担当者の言に、栗石を発見せず粘土のみなりしというによりて思うに、栗石塡充説は事実にあらざるかとも想わる、第十一章参照

そこで河床の敷石のことであるが、敷石は橋台を其の四周から保護する肝要の工事であつた、其れが洪水の勢いに扇られて一枚々々流失に委かすとすると、河床の砂礫は洗われて橋台の基礎を危くするは見易い道理である、今回の災害も或は先ず敷石が刎ね起されたのが第一原因ではあるまいかと、水際から彼処此処と注視したが、水流猶高くして之を発見するに困難であつた。此の河床工事は、湯淺七右衛門が米村茂右衛門と共に江州穴生に赴いて戸波駿河から伝習した秘法の一つで、延宝四年江州から帰り、以前の捨石が次第に流失するを見て、台独り在つて床固くなければ崩落の憂ありとし橋の上下六十間、次は同四十間、次は同二十間の間へ川一面に三重に捨石を為し乱杭を打つて之を堅め、石を運ぶに数万艘を要したと書き伝えられているが、捨石といえば只投込んだだけのように思わるるけれども、そうでなく敷石したことである、平生人目に触れていた河底の其れは其の当時の敷石の儼然たる面影で、出水の為に流失した部分は後年補充した形跡もある、これは減水旧状に復した時に調査することにする。

五、毎日新聞觀光地百選建造物第一位当選

偖而落橋の大事變は其の当日、全国放送ラジオの叫びとなつて響き渡つた、これ天下の名橋たる所以である。折柄日本の大新聞である毎日新聞は、是より先き全国の觀光地百選を企て日々読者の投票数を紙上に発表しつつある最中で、突如此の事変に遭遇したるに関せず投票を歓迎し、錦帯橋は日本の建造物の部に入つて有数の票数を占めつつあつた。岩国市民は此の惨事に怯まず益々勇を鼓して第一位を争い、投票は日に増加して天井を知らざる勢であつた、遂に其の締切日には総数百貳拾參万八千貳百拾八票に達し、百選の中建造物としては嶄然第一位を獲得して凱歌を揚げた。橋は一旦滅びたりと雖も、之を復興するの意気は沖天と言つてよい、墜落の其の日岩国市長津田彌吉氏は偶々公用を以て上京中であつたが、飛電に接し急遽帰市して直に善後の策を執つた。

六、岩国市長の錦帯橋再建基本方針

津田市長は蹶然起つて断乎たる再建復興の意図を左の如く声明して錦帯橋再建基本方針を示した。

(一) 錦帯橋が世界的名橋であつて、重要文化財たるに鑑み、其の再建が絶対必要であることは、文化愛好の日本国家として議論の余地がある筈がない。

(二) 是れが再建の経費は災害復旧であり重要文化財の保有の見地から、全額国費を以て支出することが当然である。

(三) 明治維新以後、明治の末期までは錦帯橋は国道であつて、その維持修理は国県費支弁であつたが、大正前期から市道となつて市が維持管理することになつた。

(四) 再建に当つては、三百年前の建設の姿そのままを建設することが絶対に必要であつて、建設の設計を變更すると云う

ことを考えてはいけない、但し橋脚の基礎を現代工業の方法に替える等のことは最少限度に許されてよい。

(五) 市としては再建に当つて国の指示に依り、どんなことでも協力奉仕する考えである。

先ず以上の事を基本方針として錦帯橋再建の一日も早からんことを念願するものである。

昭和二十五年九月十四日声明

七、緊急岩国市議会対策決議

落橋の当日、岩国市議会は緊急招集を受けこれが善後策を協議し、全額国庫負担を以て如何なる犠牲を払うも速に復興工事の着手を決議して散会し、万事を中津井議長に一任した。其の日市内の被害は錦帯橋のみに止らず海岸、農地、住宅の各方面に及んだので、議場は其の対策につき相当熱心に討議されたが、錦帯橋の善後策は其の中心であつた、其の決議左の如し。

錦帯橋復旧再建に関する決議

今次来襲せるキジヤ台風に依り世界的名橋錦帯橋も遂に流失の惨事を見ることは洵に痛恨に堪えない処である。

錦帯橋は今を去る貳百七拾余年前延宝元年当時の建築技術の粋を極めその精細巧緻の技工は我が国古代文化の精粋にして広く天下にその名を讃えられ大正十一年「史蹟名勝天然紀念物保存法」により「名勝」に指定され保護されて来たものである。今や錦帯橋は国宝的存在であり日本の否世界の錦帯橋としてその声価を謳われたもので、之が復旧再建は文化国家として重要文化保全の見地から当然の帰結であると考える、依つて政府は速かに復旧再建につき全額負担せられんことを市議会の決議を以て要望する

右決議する

昭和二十五年九月十四日

岩国市議会

此の如く全額を国庫の負担に依らんとする理由は左の三点に帰着する。

一、流失の主たる原因が錦川上流の山林の濫伐に因りて出水一時に殺到し激流が橋礎、橋台を危くした事、国の森林政策宜しきを得ざりしのみならず、過去十数年以来戦時の必要に迫られて過伐の弊はます〳〵此の災因を助長した事

二、同じく戦時に於て橋の上下流の砂利を採取せしむること其の度を超え、且つ終戦後も進駐軍が岩国飛行場の拡張に砂利を掘採すること甚しく、岩国市の異議に耳を傾けず為めに河床俄に低下して流勢を激發した事

三、錦川上流の県営水力電気ダムは、水量水位の高低増減に調節宜しきを計るべき筈なるに係らず、溢水の場合は俄に開扉して放流することがあるために、忽ち激流となつて段々の怒浪を放ち錦帯橋下に至るは従来といえども其の悪例に乏しからず、今回も亦然り。

以上の三項は今回の災害を招きたる主因にして、前二項は国策の結果、後一項は放漫の致す所で、岩国市の責任にあらざるは明白である、其れを市に於て全般の責任を負い、復興を荷担するということは謂れのないことである、国及び県は災害賠償の意義に於て全額の支出を以て再建すべきものであるというのが、一億五千万円の要求となつたのである。此の趣旨の当否は識者之を知るであろう、理論としては此くあるべきものと信ずる、況んや岩国市は多額の災害費を自ら負担するほど未だ裕福ならざるからである。

其の時参会せる議員は復興第一声を揚げた後世に記念すべき人々であるから、特に其の氏名を錦帯橋史に残しておく。

（旅行又は事故の為欠席七名）

中津井　実（議長）　野坂宇一　沖井磯吉
木村栄作　佐上政次　森戸守
村中柳助　錦本一郎　森橋新一
浜重甫　宮本慶一　沖宗助
河村政一　堀本哲　秋本俊輔
吉田繁人　森重弁一　渡辺泰深
森繁四郎　村重俊雄　富沢茂
松田算　上領百合藏　市岡時夫
清原正一　竹中七輔　島田梅一
粟屋衞　白本龍

当日欠席議員は左の七名であるが、其の後の錦帶橋復興問題市会又は協議会に出席し努力せられたのであるから併せて其の名を茲に留める。

瀬村感　善岡好　岡本円太郎
木戸正一　戸崎芳男　沖村初次郎
村重梅吉

理事者としては市長東京より帰市途中の為、德政助役説明に当り、其の他主事松田好生、上林正幸、岡宗則、池田金四

郎、井原事人、技師西尾保忠、市会事務局は局長村岡広真、書記石橋肇、諸氏番外席に就き、此くて復興第一回の市議会は嚴肅と悲壯の議事を終えて一と先ず散会した。

之に応じて山口県会も山口県市議会議長会議も、山口教育委員会も一齊に復興再建を決議し、之を中央要路へ提出することになつた。

八、落橋に対する輿論の同情と歎惜

名橋落失の大變災が郷県から他府県に伝わるや油然たる同情と沈痛なる歎惜の声が四方より集まり来つた、電信、郵書を以て或は詩欧を以て引きも切らず市庁に殺到した、名橋の名橋なる所以是に在りと今更ながら感激せしめられた、就中、中国民事部長ペイリー大佐のメッセージは文簡なれども万情の哀惜籠がつている。

形は失われたが精神は殘る

岩国市民の皆様

キジア台風に依つて錦帯橋が流失した事は、日本のため大きな損失であります、橋材及び橋台は流失致したけれども、あの歴史的名橋を造り上げた精神は殘されて居ります、これは直に再建を思い立たれたと云う事の決定に依つて明白であります、此の事業に於ける成功と速かなる完成を望む次第であります。

中国民事部長歩兵大佐

シー・エヌ・ペイリー

左に又その代表的なるものを掲載して、澎湃たる同情的高潮を徴知する。

錦帶橋の流失を惜む

山口県知事　田中龍夫

このたびキジヤ台風によつて、天下の名橋「錦帶橋」が流失の災いを被つたことは、真に痛惜に堪えない次第であります。錦帶橋は申す迄もなく日本三奇橋の一として天下にその名声を博し、已に国宝的存在として高く評価され、又二百七十年の歴史を持つ天下の名橋であつたのであります。

史蹟名勝紀念物に指定されて以来、昨今では、国宝指定運動を続けていた矢先でもあり、たま〳〵日本観光百選に応募して猛運動を展開中の折柄であつて、錦帶橋の流失は、これが単に岩国市民だけでなく文化財を愛する我が県民にとつて正に大きな衝撃であつたのであります。

近来日本文化の誇りである古建築古美術が、法隆寺をはじめ、次々に焼失され、今また、世界橋梁建築史上、特異な存在意義を持つていたこの名橋が、三百年の伝統と共に、その殆んどが流失したということは、何としても惜しみて余りあるものがあるのであります。県下に於ける観光資源としては、その最たるものであり、これが復元につきましては、県観光行政の面からするも、また広く観光日本の立場からするも、最大関心を持つべきものであると考えられるのであります、したがいましてこれが復元については、ひろく国民に訴えると共に政府に対しても最善の御支援を要望するものであります。

今回の災害に対してここに衷心より愛惜の意を表すると共に、復元の一日も早からんことを祈念する次第であります。

山口県議会の決議文

山口県岩国市錦帯橋は国宝的存在として又二百七十年の歴史を持つ天下の名橋であつて今回のキジヤ颱風により流失の災を被つたのは甚だ遺憾である。ついては是が復旧は観光日本の先驅をなすものであり政治的、経済的にも又極めて有意義であると考える。政府はこれが復旧につき最善の御援助あらんことを県議会の決議を以て要望する。

右決議する。

昭和二十五年九月十九日

山口県議会

山口県十市市長協議会決議文

文化国家の象徴並びに観光日本建築技術の先驅をなすものとして、全世界にその偉容を誇つていた名橋錦帯橋が今次キジヤ颱風により一瞬にして流失の惨事を見ましたことは洵に遺憾に堪えないところであります。就きましてはこれが復旧再建は文化日本建設の見地から焦眉の急を要する問題で当然の帰趨であると考えられるのであります。よつて政府は速かに全額国庫負担により再建されますよう山口県十市市長会議により要望致します。

昭和二十五年九月二十八日

山口県十市協議会長

山口縣十市議会議長会決議文

今次キジヤ颱風の襲来により国宝的存在として過去二百七十余年不落を誇つた天下の名橋錦帯橋も遂に流失の惨事をみ

たことは洵に痛恨に堪えない処である。

就いては之が復旧再建は文化国家として重要文化財保全の見地から当然の帰結であると考える。

依つて政府は速かに復旧再建につき全額国費の支出あらんことを本会議の決議を以て強く要望する。

右決議する。

昭和二十五年九月二十二日

山口県十市議会議長会

天下の名橋を失う悲しみ

文化省文化財保護委員会　服　部　技　官

錦川は急流で絶えず出水しそれが名橋錦帯橋を生んだ、約二百八十年前吉川家が全国各地の橋の構造について家臣を全国各地に派遣して各種の橋を調査研究して最も水害に強いと思われる橋を作つた、それが錦帯橋で構造は木を何本も重ね川の両側から積み出してつなぎ合せた三つの反り橋と二つの普通の橋をむすびつけた特異の形式をとり橋脚の数も少なく、徹頭徹尾水害を避けるのに苦心している、錦帯橋が天下の名橋とされたのもこのすぐれた技術のためで、大正十一年三月八日名勝として指定された、幾度か架け換えられてはいるが二百七十余年を無事に経過して今度の颱風でついに流失の厄にあつたのはまことに残念だ。

金閣寺の再建と違い架替ができる

東大工学部教授工学博士　岸　田　日出刀

錦帶橋は日本の橋のうちで世界に誇る名橋で、出水に備え岩国の藩主吉川広嘉氏が美観と堅牢を目ざして新しい様式で架橋したもの、木造で雨ざらしになるので腐朽しても又その当時の様式で架け替えてきた、錦帶橋が流失したといつても国宝金閣寺が焼失したのとは多少異なり又新しく昔の様式で架け換えることのできるのがせめてもの慰めだ。

実用的再建が復元的再建か

早大教授工学博士　佐藤武夫

颱風キジアのいたずらから錦帶橋が流失するという事件がおきた。さきの法隆寺といい、金閣寺といい、喪失の原因は異るにせよ、なさけない話である。ことに私にとつては錦帶橋が占める重要さは、三十幾年の昔、この橋を朝な夕なに渡つて中学校に通つた想い出にかかつているからである。

あの連続する反り橋を要領よく渡るには、中学生たちは勢いよく一つ橋を走り降つて、その余勢を驅つて次の橋を登りつめるのである。三、四人が歩調をそろえてこれをやるとあの橋はゆらゆらと快く揺れた。まつたくそれは不快な、あるいは不安な振動ではなく、小気味のいい彈性だつた。錦帶橋が知名なのは、岩国のあの清流で背にするお城山の緑とともに美しい環境のなかに在る橋自身の独得な形態美にもよるのだが、私たちにとつては、あの独得な形態として表われた橋の構造原理が実は驚くべく近代的で、そして周密細心な工人的創意から成つている点で瞠目に価するのであり、世界の橋梁史上にも堂々たる地位を与えることが出来るものだからである。

「両端を固定した彈力アーチ」と近代工学にこれを呼ぶ。張間の大きい構造物を最も経済的に架するとき、この手法は今日よく用いられるのだが、二百七十七年の昔、日本の、そしてこの岩国で、あれだけのものが創り営まれた事実に驚きかつ誇りを覚えないではおられない。古説による時の藩主吉川広嘉がカキモチを焼くと反るのからヒントを得たとあ

るが、そんな単純な思いつきであの橋の構造が成就されるものではない。しばしばの洪水に見舞われるごとに流失する普通の橋梁にあきたらず、根本的に耐洪水の対策をこの橋の構造に求め抜いた名の知れぬ時の工人達の英知と努力とにその功は譲らなければならぬ。

あるいは説をなして当時「明」から高僧が岩国藩に招かれていたこと、従つてあちらから橋梁の手法を学んだというが木造をもつてする錦帯橋のあの手法は全く独創的で、形式的に類似する支那のアーチ型石造橋とは似ても似つかぬものであることをこの際、はつきりしておきたいと思う。考証はさておき、名物の橋は流されてしまた。実は延宝元年にこの橋は創架されて翌二年にはたまたまの洪水に流失し、想を練り更に細部に改良を加えて直ちに再架されている。その後も大体平均三十六、七年ごとに架け替えが行われて来たが、こんど流された橋は確か昭和四年から九年に架け替えられたまま今日に及んだのだから、もう十七年乃至二十三年も経ており、寿命も超えていてキジアの犠牲になつたといえよう。錦川の水源林の濫伐が増水を一層高めたことは事実だろう。錦帯橋はつい数日前まで立派に徒歩で通る人々に対して実用物であつた。それは実用を伴わぬ古建築とは自ら違つていた。いずれ再建のことが議せられよう。そのときの問題は二つになるだろう。一つは実用的（現代的）再建、一つは復元的再建。私はちゆうちよなくあの快い揺れをゆすつてくれた懐しい感触を再び味わいたい側に手を挙げる。

九、復興概算一億五千萬円をめぐつて政府と市との論議

岩国市は市議会の決議に基き、取敢えず一億五千万円の復興概算書を作成した。一億五千万円と言へば後の決定書六千六百万円に比し過大に失する計算なれども、当初の設計は取敢えず概算なる上に、其用材の如きは、松、欅、檜に至る迄

で全部白味を避けて赤味材と為し、腐蝕防止につき万全を期するにあつた。尤も橋台は鎌倉時代の設計に擬して加工井筒式を用いて、其外面丈けは旧型の如き築石を張り廻して古来の観望を得せしむるようにしてあるが、河床下に沈着せしむるに岩盤（十九米）まで到達せしむるか、其れまでにせずとも可及的深度に沈着せしむる考であつたから、此くは巨額の工費を算出するに至つた次第である。流失後五日間に此の大略の計画を立て、九月十九日、土肥助役は之を携えて上京し建設省並に文部省に対し陳情した。其の陳情の経過は下の報告にある如くで、市議会は助役の帰来を待つて同月二十五日開会、其の報告を聞いた。当日集る議員三十五名欠員一名、土肥助役の経過報告は左の如き意味である。

『此問題は建設省と文部省とに分れ、其財源は大蔵省に属する。建設省の意見は錦帯橋は道路であるから之が陥落すれば其の復旧は道路として取扱うの外ばない、隨つて復旧に際し国庫の補助を与へるには、彎曲せる錦帯橋は交通上から見て甚だしく不便であり車馬の通ぜざるものを道路として認めることが出来ないから此場合平坦な橋に改めることを希望する、補助を与うるにしても其の立前の下に於てせねばならぬから、鉄筋コンクリートの設計に依り予算を組むことにするというので、木造の原形を保存する所謂文化財主義本位により補助を与うることは建設省としては認められないというのが其の主張である。

之に対して文部省の意見は、文化財保護委員会に於て主張せらるゝのであるが、「史蹟名勝天然紀念物」によつて保護せらるゝ此橋は原形によつて復旧したいというにあつて、建設省とは全然反対である、但し文部省としても他の文化財の復旧費に比較して一億五千万円の要求を全部納れることは困難で、橋の全部を直すにも五千万円程度ではあるまいか。文部省は此見込を以て大蔵省に交渉するが、文部省が従来取り来つた国宝関係の国庫補助は大体其の費額の五十パーセントを超えぬから、錦帯橋復旧費五千万円として精々其半額二千五百万円が貰へれば相当よい方であるというのが文部事務当

局の話である。更に建設省の意見を綜合すると、建設省は交通上利便の橋（道路）を主として予算を組むの外はないから之に文部省の文化財としての補助を合して復旧することが此問題の要領となる。されば一億五千万円全額を国庫から補助せらるゝを希望したところが、其れは甚だ困難に想われるから市は非常の決心を以て推進運動を為さねばならぬと考える。』

土肥助役の報告要旨は此くの通りである。之に依つて見るに、建設省は其の役所の立前通りに文化財としての保存を眼中に置かず専ら道路としての復旧を主眼に、道路の災害と見做して補助を与へんとし、其額も鉄筋建設を基礎として工費を算出するに対し、文部省は其の役所の立前として文化財として復旧せんとするのであつて両者相反するが如きも其れは岩国市に取りては関する所でない。両方から補助を兼併せて復旧を進むればよいのである。只だ一億五千万円に達すること能はざる残餘の額は、主として今後山口県と岩国市との捻出に待たねばならぬ大役を存するのである。

状勢斯の如くであるから一億五千万円の計画予算を獲得することは、前途甚だ望み薄となつて来たので、之が設計を変更し其れより少ない予算を以て遂行を計らねばならぬことになつた。偶々建設省より山口県のキジア颱風被害調査の為に、十月十六日、技官篠公平氏を班長とし樋口技官（岩国市担当）斎藤、吾妻両事務官一行が来県し、錦帯橋流失の模様を視察して其の災害の程度並に復興の方法につきて親しく調査し、木橋、土橋、鉄筋コンクリート橋として何れかを架設する設計を要求され、其の追加として近代最高の橋梁たるメタリツク鉄鋼橋、タイドアーチ鉄鋼橋、ハウ式木造トラス橋等の設計をも要求され、尚ほ原形復旧する木材の種類別、橋脚の種別に依り三、四種類の設計をも希望されて、それ〳〵設計を行い、市は一行の去つた後を追うて十月十四日山口市に於て其審査を受け、爾後数回の訂正を求められ最後の成案を得たのである。是は建設省として補助を与うる金額の基礎を定むる為で後に十二月二日に至り、原型復旧の構造を為す

ものとして、査定の達示を受けた四千六百七万三千円の国庫補助額は是に出発したのである。

十、政府に対し市民的大運動の展開

斯く篠技官一行が帰京復命によりて建設省の査定進行する一面に於て、わが岩国市も予算減額と設計變更による調査を進めつゝ、可及的多額の補助を得んが為、茲に市民全体に呼びかけ市民総動員の精神と態容とを以て、各種団体の代表者を上京せしめ建設省並に文部省、県出身の国会議員に陳情せしめ、之が速成並に財源の援助を可及的多からしむる市民的大運動を起すに決し、其一行は十一月一日出発、同九日帰郷、九日間を費やして大に運動するところがあつた。其の顔振れは、岩国保勝会理事長手島正二、岩国商工会議所副会頭小林銀一郎、同幹事戸崎正雄、岩国市青年協議会長中沢徳雄、岩国市婦人会長大塚百代、岩国消防団柴山正人、地区労働組合河上佳生、新聞記者団田中豊の諸氏を中心とし、市会議長中津井実、議員粟屋衛、同森戸守、同副議長渡辺泰深、市助役徳政繁生、西尾施設部長、上林人事課長等総勢十五人の大部隊が袂を連ね、先以て当主管建設省、文部省文化財保護委員会、大蔵大臣池田勇人、山口県東京出張所長高尾の各氏を歴訪して熱意を表し懇願する所あり、一面山口県出身衆参議院議員たる佐藤栄作、周東英雄、重宗雄三、栗栖赳夫氏等を訪うて応援を求むるなど奔走昼夜を別たず努力した、いずれも此の不測の災害に対し痛切に遺憾の意を表し政府当局としては成し得る限りの助成を与うることを約し、且つ県出身の国会議員は特に応援を吝まざる旨承諾せられた。

如何に設計に變更を加えて、用材は全部赤味のみを用いず、井筒は八メートル又は九メートル程度に止めるにしても概算六七千万円を要するが、其の大部分は建設省文部省に於て分担して貰わねばならぬ市の財政状態であるから、政府と国会の深厚なる同情に訴うる外はない、斯くて一行は一応の陳情を終え少なからぬ成果を収めて帰郷した。

是より先、之れが設計を立つるに、特に岩国に縁故深き工学博士佐藤武夫（岩国中学校出身、建築）工学博士青木楠男

（橋梁）の両氏に依ること少なからざりしは記録すべき一事項である、両氏とも新進の技術家であるから建設と橋梁の設計に於て固より遺漏あるべき筈はない、市が両氏の内部的援助より数歩を進めて、後の昭和二十六年二月二十二日の起工式に当りて、公式に「市顧問」として両氏を煩わすに至つたのは当然である。

十一、錦帶橋復興設計の再編成

建設省の設計査定は十二月三日（二十五年）終了し市の變更設計書は合格し、原形に復旧認可となつて四千六百七万二千円を復旧総予算の中へ補助することに決定した、東京より帰庁したる津田市長は十二月六日の市議会協議会に於て、其の結果を左の如く報告した。

キジア颱風の災害復旧は原則として二十五年度に施行のものに限るのでる。今回査定を受けた額で原型復旧が出来るかどうか多少の疑問がある。上等の檜や欅を使うと莫大な額に上ることは只今議長の報告通りであるが、錦帶橋再建は輿論の一致であるという同情を受けているので、建設省が査定した単価を多少超過しても立派なものを造りたい、そのためには文化財や山口県の助成を願い、それでも足りなければ一般の寄附を、止むを得ざれば市費を以てしてもと考えている、初めは一億余円の設計を出したがこれは材料を高く見積つたからである、此度の査定は建設省としては最高の同情と敬意を払はれたのであつて大いに感謝すべきで、市としてそれに酬いるよう充分の努力を払つて成可く早く立派なものを建設しなければならぬ、それも建設省としては二十五年度には査定額の全額を出してくれるが二十六年度になると三分の二の補助となつているので、二十五年度中に材料なりとも買つておかなければならぬ、なお精密な設計は全国的にその道の権威者に依頼して万古ゆるぎなき文化橋としての錦帶橋を造りたいと思つているので今後とも市民の協力を切に望む。

此くして一応の段落が着いたので、同十二月下旬、市の施設部長西尾保忠氏を首班とし「錦帯橋建設課」を特設して技師八賀盛藏氏を課長とし、茲に新に陣容を整えて発足した。

市の門戸は是より開かれ準備は着々進行して、西尾施設部長、八賀建設課長の手により新たなる設計が出來上つた、其の梗概は下の通りである。

一、工費総額　金六千六百參拾貳万円也

仕　様　梗　概

本橋は総て見得掛りを災害前の形状に準じて現寸形及図面の通り施行するものとする。

一、材　料

(一) 欅、檜、栗、樫は全部赤身材とする。

(二) 松は其の断面の拾分の八以上赤身材とする。

(三) 橋板及高欄材料は芯去り小節材とする。

二、工　法

(一) 材料及施工方法に就ては、設計書に記載してあるからと雖も、総て見得掛りの部分は、橋裏面共に全部鉋仕上とする。

(二) 橋台の石配置は災害前の形状に準ずるものとする。

本書記載外の事項は山口県土木工事仕様標準によるものとする。

工費総額　金六千六百参拾貳万円也

内訳（総体）

名称	材料	長	末口幅	員数	単位称呼	単価	計	摘要
橋体工							三二、二八四、八四五〇〇	別紙の通り
橋脚工							二六、三三三、六一七〇〇	〃
雑工							六、八〇七、五五〇〇〇	〃
機械器具費							五〇〇、〇〇〇〇〇〇	〃
保険料							三九三、九八八〇〇	〃
計							六六、三二〇、〇〇〇〇〇〇	

右の内訳（各橋別）

位置	工種	名称	材料	長	末口幅	厚	員数	単位称呼	単価	計	摘要
橋体工		第一橋					一	径間		六、〇九六、八〇二円	一六
		第二橋					一	〃		六、五二四、一五七	二七
		第三橋					一	〃		六、三八七、八九六	一〇
		第四橋					一	〃		六、六〇四、〇四八	九五
		第五橋					一	〃		五、一〇八、一四六	五一

別紙内訳書の通り本内訳に限り尺貫に依る

普通脚橋基礎				一、五六三、七九四〇〇		別紙内訳書の通り本内訳書以下、米法による。
小計				三二、二八四、八四五〇〇		
橋脚工（橋脚工軀体井筒）		四基	五〇、二〇〇〇〇	二〇、〇四四、〇〇〇〇〇		別紙内訳の通り
左岸橋台工				一、〇一一、五〇〇〇〇		〃
右岸橋台工				一、〇七一、五〇二〇〇		〃
床固工				四、二〇六、六一五〇〇		〃
小計				二六、三三三、六一七〇〇		
雑工						
雑工				六、一八二、五五〇〇〇		足場損料一四、二〇四、空粒分一、粒二、二人五、六八一、六〇〇円防腐剤一石当り二五〇〇円一、五九三石分三九八、二五〇円、残鞍木造部取除一粁一、七三人三九五、粁一〇、二七、七〇〇円
仮締切費	一〇〇米	一、〇〇〇〇〇		一〇〇、〇〇〇〇〇		市費工事
仮桟橋設備費	一五〇米	三、五〇〇〇〇		五二五、〇〇〇〇〇		市費工事
小計				六、八〇七、五五〇〇〇		
機械器具費				五〇〇、〇〇〇〇〇		軌条損料五〇〇米一ケ年間三〇〇、〇〇〇円動力機ウインチ損料一五〇、〇〇〇円、デレッキロープ損料五〇、〇〇〇円

小計	五〇〇、〇〇〇〇〇	
保険料	三九三、九八八〇〇	労務費一四、〇七一、〇〇〇円に対する労災及失業保険料千分の二十八
小計	三九三、九八八〇〇	
合計	六六、三二〇、〇〇〇〇〇	

以上（此再編成は後の状勢の変化により更に若干の修正が加えられた、後章に記す）

此案は津田市長より増田建設大臣へ対し協議の形式を以て、昭和二十六年一月十七日付岩錦發第壹号の書面を以て、提出することになつた、別に田中山口県知事よりも同十七日付河第七〇号を以て進達書を建設大臣へ送付することになつた。

岩錦發第壹号

昭和二十六年一月十七日

岩国市長　津田彌吉

建設大臣　増田甲子七殿

昭和二十五年災害復旧工事（錦帶橋）設計協議について

曩に災害査定の際設計協議となつていた右工事につき別冊設計書の通り設計を樹立したので協議する。

河第七〇号

昭和二十六年一月十七日

山口県知事　田中龍夫

昭和二十五年度市町村災害錦帶橋復旧工事査設計書提出について

先きに提出方御指定のありました昭和二十五年市町村災害復旧工事錦帶橋査定設計書今回岩国市より別冊のとおり提出されて来ましたので検算審査の上進達します。

十二、錦帶橋復興史上の光輝ある東京に於ける土木学者の会議

八賀建設課長は此書類を携えて昭和二十六年一月二十四日上京し、建設省に対し三日間に渉りて内交渉した、是に伴うて市は政府と国会に猛運動を継続すべく、相続いて德政助役、中津井市会議長、市議会施設委員長秋本俊輔、同委員竹中七輔並に西尾施設部長等六人の上京となつて、一面政府に訴うると共に、一面東京居住の橋梁建築や治水の権威者たる諸博士並に文部省文化財保護委員、建設省の諸官たちの出席を求むる一集会を催うし、其智脳に訴えて万全を期することになつた、時は同月二十七日午後二時、東京銀座エーワン会館に招いた、招に応ずる人々土木学界七名、建設省十名、文化財保護委員会二名、山口県二名、参議院議員一名、主客合せて三十二名、実に一世の専門家を傾け尽すの観があると共に、錦帶橋復興の運命を決する大会議であつた、其の氏名は左の如し。

工学博士　田中豊（橋梁）（東京大学名誉教授　横川橋梁株式会社相談役）

工学博士　大熊喜邦（建築）（文部省文化財保護委員会専門審議会第二部会長）
工学博士　鈴木雅次（土木）（日本大学教授）
工学博士　関野克（建築）（文部省文化財保護委員会建造物課長）
工学博士　佐藤武夫（建築）（早稲田大学教授）
工学博士　青木楠男（橋梁）（早稲田大学教授）
松井源吾（建築）（早稲田大学講師）
富士川金二（文部省文化財保護委員会総務部長）
浦谷吉雄（同上　紀念物課長）
目黒清雄（建設省河川局長）
賀屋茂一（同　防災課長）
近藤鍵武（同　補修課長）
酒井信男（同　技官）
田中甲三（同　事務官）
野田利朗（同　技官）
関国三（同　技官）
望月邦夫（同　技官）

森　知　行（同　技官）
樋口哲司（同　技官）
参議院議員　重宗雄三
山口県副知事　小沢太郎
山口県技師　梅村吉朗
岩国市助役　徳政繁生
同施設部長　西尾保忠
同錦帯橋建設課長　八賀盛藏
同市議会議長　中津井実
同市議会議員　秋本俊輔
同市議会議員　竹中七輔
同　事務局長　村岡広貞

会議は先づ岩国市を代表して西尾施設部長開会の挨拶を述べ、次で徳政助役より敬意を表し、次で小沢山口県副知事より県を代表して挨拶あり、続いて建設省防災課長賀屋氏より災害査定経過の報告あり、八賀岩国市錦帯橋建設課長より実施設計概要の説明終つて質疑応答に入る、其中に就て此際錦帯橋の構造に根本的改築を施し鉄筋コンクリートと為し、従來の木造を廃すべしという議論と、文化財保持の爲原形通り木造となすべしとの両論の対立を見たが、結局コンクリート

式は少数にて文化財の立場より橋梁部は木造と為し、只橋脚（ピアー）に至りては其内部の構造を改めて旧型を撤廃し、近代鉄橋のピアーと同型のコンクリート輪形の井筒として基礎を鞏固なものにするに決定した。

建設省の災害査定報告（賀屋防災課長）

右に次で賀屋防災課長は起つて

『河川局長が都合で少し遅れますので、私から錦帯橋を災害復旧事業として採択致しました建設省の方針の概要を申上げます。

錦帯橋の流失は地元県市民の失望落膽は想像に余る所であり、又錦帯橋架設の沿革並世界に秀ずる構造、築造の妙等多少でも知つている者と致しましては、真に惜しみても余りある所であり、巷間歎声を漏す者の多い所以でもあろうと思うのであります。

錦帯橋はもと国道二号線の経過する所でありましたが、国道が錦川左岸沿いに變更されましたと同時に、現在の岩国市道に移管されたのでありまして、本橋は単に文化財としてのみでなく公道として存して居るのでありますので、国としてはこの復旧は必ず実行しなくてはならぬ責務が存するのであります。

然しながら復旧方法につきましては、種々議論の存する所でありまして必ずしも災害復旧法規の原形復旧にのみ拘泥するの要はなく、更に改良を加えて復旧を致しますことも別に規定に反するものでもありません、復旧方法についての論議のあります所は主として錦帯橋の経済的価値を論ぜられる点であります。

勿論、錦帯橋は橋のみについて其の利用価値を論じますときは、弧形である原形はこの利用価値の少ないことは申すまでもありませんけれども、本橋が文化財として世界に秀ずるものであること及岩国市の盛衰に拘わる存在であることに考

へますと、この価値は単に橋のみについて判断は為し難い点があるのであります、又復旧工事の費用の点からみましても現在位置に架設致します橋は相当な規模を持ち、又強靱な構造のものでなくては維持できない見透しもあり、斯くては工事費に更に多額を加へなければならない財政上の考慮もあり、種々比較検討の結果、原形復旧として錦帯橋の復築を定め更に設計の内容については新技術も充分取入れ再び流失のおそれのない錦帯橋の復旧が決定されたのであります。

又、文部省の文化財方面の関係から本橋の復旧につきまして、多大の御支援を頂きましたことを感謝致しますと共に、更に今後の御支援を御願する次第であります。』

岩国市錦帯橋建設課長八賀氏説明

右に次で八賀課長は錦帯橋再建の設計に就て前項記載する所の要領を説明して、この諒解を求めた（此処には省略す）

右終つて市を代表する徳政助役は、今回の大災を招ける主たる原因を説明し、六千六百万円の国庫負担金額要求の理由を陳述した。

徳政助役役左の点に懸念を持つているから是について意見を承わりたい。

一、一米ほど橋体を上げることによつて洪水の防止を計るが、観光の点から橋台取付如何にしたらよいか。

二、橋脚の中へ埋込となる部分の防腐対策を如何にするか。

三、脚内部は井筒にするが、外部を積石とする為め此の部分が剝げるような心配はありはせぬか。

近藤建設省補修課長　予算及材料について岩国市の説明を願いたい。

八賀岩国市錦帯橋建設課長　木材は千五百九十三石の内松七百八十四石、檜五百三石、欅三百七十六石、樫四石、栗二

十六石、欅と檜は赤味を使用、松も八割以上は赤味を使用する、又断面は一尺――二尺、長さ二〇尺以上等の条件によると之を求めるのに相当困難はあると思うが、現在の岩国附近の木材業者状況により大体見透しはある。

此外に銅板九百二貫、鉄五十百九十三貫を必要とするが、銅板が入手困難と思う。

富士川文部省文化財保護委員会総務部長　今度再建したら今迄のような二十年毎の架換は無くなるか。

八賀　今迄は橋板高欄は二十年毎位いに取替であるが橋の本体の架換は三十五年毎位いであつた。

富士川　それでは三十五年毎に矢張り架換するのか。

八賀　これについて永く保つようにするには如何にしたらよいか、特にアーチの埋込の部分は腐朽が早いので其れについて御意見を承はりたい。

富士川　三十五年毎にということになると、文化財保護の立場から当方も其の度毎に一部ではあるかも知れんが責任を持たねばならないから、これを永く保つようにされることが望ましい、又其の他の面からも考慮されたい、例えば流失の原因について巷間上流ダムの調節の不良とか、森林の過伐と云うようなことが言われているが、其れらの問題についてもこの際慎重に考えていたゞきたい。

徳政市助役　大正時代までは国道で国が維持していたが、大正末期から市道に入つたから其後は県と市とで維持して来た今後三十五分毎に架換するについて、市は年々百万円――百五十万円を積立てる考えである。

富士川　流失原因が前申したように直接洪水によらず、為政者の方に不備があると聞いているから、建設局も治水策について責任を持つて考えていたゞくよう地元から要望されたい。

酒井建設省技官　錦川ダムの調節不良によると言われるから県で水位、水量を調べたが特に其れによる点は認められない

又森林の過伐によるということは全国的の問題であつて確に其の傾向はあると思うから十分考慮しなければならない。

其外、落橋の主な原因は脚の石積が原因と思われるから脚の構造を考えたいと思う。

鈴木雅次博士　昭和八年の洪水と今度と何れが多かつたか。

樋口建設省技官　昭和八年は九・四六米、今度は其れより五〇糎位低い。

鈴木　脚は上部から壊れたか、河底の張石がとれて下から堀られたのか。

酒井　脚の途中から壊れたと見る、張石も多少剝げて影響していると思う。

鈴木　洪水量は計畫洪水量より多かつたか少なかつたか。

樋口　少なかつた。

鈴木　下流の用水取入口の床止は元の通りか。

八賀　元の通りである。

鈴木　上下流の遊水地の最近の状況如何。

八賀　下流の遊水地は河川改修の為小さくはなつたが、上流は元通りである。

鈴木　それでは、洪水時の流量や流速の増加に直接の影響を持つ上流の遊水池が狹めたのでも無く、又下流の床止の高さを低めたのでも無いから、為政当局の夫れ等に対する曾ての処置が誤まつて居たとは言へ無い。

又此の度の洪水量が計画のものより少ないのだから、此の場合は、森林過伐に依り流量が特に増した為とも言へない。

但し仮に其影響が有つたとしても、戦時中の過伐は、県当局の責任でなく全国的の問題である。いづれにしても、此際に為政者の欠陷をさがすよりも寧ろ落橋に至つた原因の若干が、橋脚その他の構造上にも有つたとみなして、之を慎

重に分析研究の上、構造上の欠陥の急所を新しい技術に依つて、完全に補うことを思うべきである。

酒井　それで今度の橋脚基礎を井筒にした。

徳政　全体流失の原因については茲に改めて申上げたい、これは岩国市の責任というよりも国の責任に属する面が多いということを心に留めていたゞきたい、以前より橋の上下流の砂利を採取せしめた為に、川底が低下し流心が変つたと思う、これは土台石の流れた方向が横へ振つている点より考えられる、砂利採取については、市としては極力反対したが当時飛行場施設の為軍より要望されて止むを得なかつた。

水量については水位計によると、上流の藤河村方面は今迄より高かつたが、錦帯橋附近は今迄より低かつた、この原因は未調査であるが向道ダムを午前三時に開扉しているから、到達時間を六時間と考えると第一橋の落橋した午前九時頃は丁度水量の増してくる頃だと思う、随つてダムの開扉の影響があると思う。

これに依つて見るに橋の流失の原因はこれら特殊の不用意から招いたもので第一砂利の採収に任せた事、第二、奥地森林の濫伐、第三、向道ダムの開扉の三つが主因となつたものであるから、国に於いてその責任を明かにしていただくと共に、之れが復旧に対する方策並に其経費の支出についても大に考慮を払つていただかなければ成らぬと思うものである。

青木博士　落橋の原因が如何であるを問わず此場所で結論に達することは出来ないと思うから、今後再び壊われないようにするには、如何にしたら宜いか、次の問題について考えたい。

一、橋体を一米上るようにした根拠は何処にあるか。

二、砂利採取等で川底は低下しつゝあると思うから、八米の井筒で砂利交りの地層まで下げた位では足りないと思う。

三、土木家として考へるときリヤカーも通らない橋よりも、もつと実用的な三十五年毎に架換へる橋でなく、永久的の橋梁を架設したいのであるが、私は岩国の人間でないので、岩国の土地の人が昔の錦帯橋に対して持つ憧憬の深さについては全く解らない、岩国の現地の人達の心持も相当重く考へねばならないかと思う。

四、木材とした時は特に腐蝕する部分は専門工場へ送つて現在の化学技術で完全な防腐処置をされたい、尤も此為に表面が汚れ又工費も増すが止むを得まい。

五、桁を一枚々々重ねて締めているが是はジベルを配置する工法も考慮されたい。

六、木材は十分乾燥したものを使用する必要があるから、早く手配されたい。

八賀　橋体を一米上げたのは、流量によりて計算したのではなく、前後の堤防が大体一米高い理由と一米以上は外観に影響すると思つて一米にした。

井筒の深さは河床勾配が四九〇分の一であるから、洗掘深さを想像すると大体三米位と思う、其の時の支持力を計算すると三米位となり、計六米で之に二米の余裕を考慮して八米としたが、尚実施に当りては毎脚ごとに地質を調査して、適宜加減し完全の所迄堀下げたいと思つている、ジベルを使用することについては尚研究を進めたい。

田中博士　（此の処へ田中豊博士は此際改造するなら寧ろ木造を廃し永久不朽不落の鉄筋コンクリート橋たらしむべしとの持論を披瀝せられた）

私は将来手数のかからないようにしたい、又手に触れて見る人は少なく、外観又は写真によりて見る人が多いと思うから鉄筋コンクリートにして外観が木材に見えるような工法を考えて見ては如何と思う。

富士川　私共文化財委員会方面の意見としては、原形で残したいという意が多い、これは世界に屈指の名橋であるのと

簡単に車も通れるようにして此の珍らしい形を無視したなら、錦帶橋として名称の価値が失はれるから一般の橋のようにすることは絶対反対であるが、再度壊れないことゝ見て変りないと云うことになれば木材でも鉄筋コンクリートでも支障は無い。

酒井　私個人の意見ですが、錦帶橋は形の變つている点もあるが、三百年前に作つたことを考えれば工法其のものを残して置きたい。

田中　其れは昔の図面も残つているから実際には形さえあれば、いゝと思うから此の問題（鉄筋コンクリート）も一応取上げて考えて見るべきだ。

富士川　金閣寺も外観さえ昔通りに見えれば、コンクリートでもいゝと云うことになると思うが如何。

田中　鉄筋コンクリートでも悪くはないと思う。

富士川　文化財としての「国宝」ならば原材料と原型であるべきだ、然し単に「名勝」の内の一部で然も型を尊ぶということから、一応鉄筋コンクリートでもいいと思はれるが、變形のこの橋自体を文化財として又この工法を残すことを考へるならば、永く保存される最善の方法を選んで可成木造とすることが望ましい。

青木　鉄筋コンクリートにしたとして、原型通りで矢張り車の通らないようにする御意見ですか。

田中　非常なときは通れるように考えたい、但し私は錦帶橋をコンクリートにする意見を固く持つていることを本日の会議の記録に残して置いていただきたい。

大熊博士　文化財としては木造で残したい、只だ脚の取付部は考慮したい。又親柱は角材とし、従つて擬宝珠でなく昔の形の金具にするが良いと思う、地覆の下には水はけの為、猫木を置くが適当と思う、これは橋板と地覆との接触を避け

腐りを防ぐ手段となる、この橋は Wonders of The Wold という書に、世界的名橋として掲げられて居るから、昔の姿のまゝ永遠に保護されたい。

青木　刎橋の附け根は元通りにするのか、隔て石をやめてコンクリートで持つようにしたいと考える。

八賀　設計はそうなつている。

富士川　鉄筋コンクリートにしたときと木材にしたときと、何れが工費が安いか。

酒井　鉄筋コンクリートの方が安い。

青木　本日渡された図面を見ると昔見た古いのと欄杆の様式が變つているが、何時頃變つたのか。

竹中市会議員　高欄の變更は元祿の頃高さの一部と束割り等變つた事もありますが、此變更では、素朴でおとなしい外観には、大した變化は見られませんが、大正八年の板と高欄の取換への時、古来の素朴な形を破つて優美な擬宝珠付きのものに變へ、更に昭和の架替の時親柱九寸であつたのを一尺一寸に太めたのであります、大正昭和の両變更の時は、相当大きな異動がありましたが、外観を優美にする方がよいと云う意見が多かつたので變更したのであります。

佐藤博士　高欄の様式は古式の形がよいと思う、擬宝珠のついたのは寔に優美で結構だが、錦帶橋は独特な木構造で、特にこの木造美が高く評価されるのだから、高欄もやはり昔のような素朴なもので様式的に統一をとるべきだと思う、田中先生の鉄筋コンクリートで形だけを元通りにするという御考えは造形倫理の立場から私どもは取りたくない、昔通り木造りで復原すべきである。

鈴木　橋脚基礎の工法に就て、昔時は一般に其の基礎の根入を水中では深く施行する事が、殆んど不可能である為め、此錦帶橋の名物となつて居るが如く、橋脚周囲の河底一面に対し、極めて入念な石張工を施して、橋脚附近の洗堀を防い

だのであつた、恐らく之が落橋防止の近江名人の口伝の一だらうと思う、（本書著者曰く、近江名人とは戸波駿河を指されたものである）斯くの如く昔は只だ平面的の工法に始終して居たのだが、現代では、例へば井筒等に依て基礎の根入れを水中でも深く下げる、所謂立体的の施工が可能となり容易となつた。此の点が新旧の工法に大きな時代の差異を見るのだから、今日では新しき工法の長所を充分に活して、橋脚基礎の根入れは、なるべく深くするがよいと思う、此意味に於て此回、井筒式を採用されたのは賢明である。但し洪水時には、先刻の河流による洗堀に対する御説明によりても、もつと堀れる様に推測されるから、井筒の底は、元案より更に深くするを希望する。

次に、元の橋脚の中身には、空積のガラ石を詰めて多少水を通す様に工夫してあつたと聞くが、其の効果は如何に。若し其の効果の顯著であつたならば、此度の井筒式は其の点では不利だかどうか。

八賀　効果があつたようには見えない。

鈴木　橋脚外面は美観上矢張り石張りとして残したいが、前の石を使用するのか、又は新に間知石（けんちいし）を使用するのか。

八賀　前の石を使用し練積とする。

鈴木　橋脚をコンクリートの練石積で包めば中に入る部材は通風が悪くなつて腐蝕が甚しいと思うがこの対策はどうか

佐藤　流失直後に残材を見たが、脚は入つていた部分は欅で腐蝕が甚だしくなつていた、これは如何なる腐蝕菌によるか目下十代田教授にお願いして調査中である、前の架換の時にはテルミトールなどを塗布したと聞いているが、今度は新しい防腐構造、或は防腐処理の技術を取入れるか、此部分だけ、鉄筋コンクリートにするか、とにかく一番の弱点だから研究を要すると思う。

鈴木　仮に橋体の大部分が木材で復原さるるにしても、少なくとも、練石積の中に埋めらるゝ部材だけは是非とも鉄筋コ

ンクリートに改めてもらいたい、特に腐蝕の顕著な部分だけを耐久的にする事に依りて、橋全体の生命を著しく永くする。此場合に其部材の外に露出する所は他の木造の部分と同じ色の迷彩を施せば足りる。

目黒建設省河川局長　岩国市は再建費について全額を国に依存する意向か又は市として何程か考えているか。

（これは本問題中の重要なる質問である、之に対して徳政助役の応答は又重要であり又必死的に説かねばならぬことであつた、其れは橋の流失が市の管理の過失から来れるものにあらずして、其の多分が国の責任に属するからである）

徳政　其れは国に於て当然全額を負担していただきたいと要望する、前に申したように、此の災害は全く当時の国策上、川の上流山地一帯の森林の過伐が出水一時に殺到する異變を生じ、加うるに橋の上下流のバラスの濫堀が河床を低下して橋辺の流勢を激しくし、且つ流れの方向に變化を来し、而も上流の發電ダムが豪雨連日溢水の際には俄に開扉して下流に放つなど、いやが上にも橋台を侵すに至つたので市は頗る危惧を感じ当局に注意を促したこともあるが、戦時の国策の必要上顧みられず遂に今回の出水に依りて大災害を招いたのであるから全額国庫負担を御願いするのも敢て無理でないと考える次第である、しかし此橋が道路として利用度の少ない点もあるから全然国に依存する考はない、市に於ても若干の差額を負担することは考慮している、又山口県に於ても負担せらるゝよう御願いする覺悟である。

目黒　文部省の是れに対する意向は如何であるか。

浦谷文部省文化財委員会紀念物課長　災害当時大藏省とも交渉したが、再建費の過大な為め予算面で災害から外された、建設省に於て文化財の意を含んで査定されたことに感謝する、当方に於ても一応災害からは外されたが、尚交渉の上、時期を見て災害費も再度持ち出したい、又保存費についても差当り或程度のことは出来るが、尚増額したいと考えている、然し地元の覺悟もお願いする。

徳政　超過金額については地元も勿論負担するが、大部分は文化財当局に御願いしたい。

目黒　再災害を考えると、特に維持について十分のことをしたいから、文化財の方で相当考えて頂きたい、当方は経済的について第一に考えているから、其の意味を考えて負担して頂きたい。

浦谷　現在其方向に進みつゝある。

目黒　後に大蔵省から建設省に抗議が来たとき、文部省も責任を負われたい。

富士川　予算は少ないが其の含みを以て目下考え中である。

目黒　建設省としては鉄筋コンクリートにするのが本旨であるが、文化財の面を考慮して木造にすることを認めたのであるから其意味を十分考えられたい。

浦谷　無形文化として残したい委員の要望もあるから、木造として予算を考える。

此会議は此くして経過し、中津井市議会長、重宗参議院議員の挨拶があつて閉会となつた、田中博士は鉄筋コンクリート改造説を以つて一貫せられた、これも千古不落のものとして昔の面影を伝えんとするにあるので、一面の理由はあるが、此橋は木造古建造物の故を以て文化財として始めて世界的価値あるものであるから、依然木造として吉川広嘉の構想、児玉九郎右衛門、湯浅七右衛門、米村茂右衛門当時の遺蹟を存することが本筋であろう、されば会議の結論は木造に傾き田中博士のコンクリート説は永く会議の記録に残して百年二百年三百年の後までも相伝え、多彩なりし此会議が錦帯橋史の上に、昭和時代の学界耆宿と新鋭の士を煩わしたことを、永く記念として遺さんとするものである。

十三、建設省の査定終決、再建方針確定
いよ〳〵復興工事に着手

越えて一月二十九日付、建河収山乙第一二号を以て建設省より岩国市長へ宛て、左の通りの回答が來た。

建河収山乙第一二号
昭和二十六年一月二十九日

建設省
建設省　河川局長
道路局長

岩国市長殿

昭和二十五年災害復旧工事設計協議について

昭和二十六年一月十七日岩錦發第一号で協議の右（錦帶橋）については左記の通り措置するにおいては差支えない。

記

一、井筒長については実施に当り地質調査の上決定し、なるべく深くすること
二、井筒構造については更に検討のこと
三、橋体の橋脚篏入部については腐蝕せざる様構造等につき留意のこと
四、高欄は古式に倣ふ様考慮のこと
五、検査額を超過する工費は別途負担のこと

右に依りて見るに、建設省は岩国市の希望通り、古式に則る設計を以て工事に着手するを承認するに至つたことは特に

注目すべきである、初め建設省は省の立前として鉄筋コンクリートを以て道路（平坦橋）を築造するを原則とし共れに對する経費を支出するの外、文化財保存方面の問題は文部省の管轄に属するとして之を固守したのであるが、第四の高欄は古式に倣うよう考慮せよとの一項を加うるに至つたことは、蓋し此の橋を単なる近代式実用の具にのみ供ずるを主眼とするときは、其の古代建造物たる特色を失うことに想到したものと思料せられるゝのである。其の是に至りたるについては同省防災課長たる事務官賀屋茂一氏の尽力を多とせざるを得ない、賀屋氏は吾が岩国市保津の出身にて郷土の名勝錦帯橋が、其の古来の芸術的作品たる特色を失わんことを虞れて、省議を道路一辺倒に傾かしめず文化財保護維持の方向に誘引し、此の承認を速かならしめたる其の内部的斡旋は吾人の想像の外にある、此事は錦帯橋再建史の中に加えて氏の貢献を伝えねばならぬ一挿話である。

此くて一行は東京より帰郷し、昭和二十六年二月九日、市議会の開会に際し協議会を開いて上京運動の顛末を報告した

先づ上京委員の秋本俊輔議員（施設委員長）より左の報告があつた（速記）

『錦帯橋の件につきまして御報告申上ます、錦帯橋再建の件につきまして、ちようど上京致しまして市より私と助役が参りまして博士十七名と建設省の係官が十名、文化財の方から三名、副知事、東京出張所長、梅村技師あたりと前後五時間に渉りまして、いろ〳〵協議致しました結果、原形に復するという結論が出たのでございます、結局実際の設計は六千四百万円で国庫補助の四千五百万円に約二千万円不足を生じておるのでありますが、これは文部省の文化財の方において五百万円負担する、後一千五百万円は県と市が相談して調達するということに決定致しまして、来る二十二日に起工の式を挙げるという運びまでに相成つてあるのであります。（中略）

そしてこの錦帯橋の橋台の特殊性に顧みまして請負の方法を市長に一任してくれ――つまり随意契約にすることを市長

の方から希望――一任してもらいたいということで、これは昨日の委員会で満場一致可決した次第であります、なお詳細に渉りましては同行致しました建築課長もおりますから詳しい点はその方から……』

之に代つて同行の西尾施設部長は

『先程委員長さんから錦帶橋のことにつきまして御説明がありましたが、なお私の方から申上げます、当初、建設省の査定は四千六百七十二万円でございましたが、今度橋杭の質を元よりはよくした関係で六千六百三十二万円ということになつたのであります、それで建設省の方ではこれでまず認めてやるというので、起工認可をもらつて来たわけであります、但し此中には条件がありまして、橋脚の深さには実施に当つて調査の上決定し、なるべく深くすること、それから構造については更に検討する、三が河底に埋まる部分については腐蝕しないように留意のこと、それから四つが高欄は古式にならないように考慮せよ、五が現在より超過する工費は別途に負担すること、これだけになつておりまして、先程委員長さんからお話がありましたように、二千万円ばかり超過する金は、文化財と市と県とが別途に支出をもつてやるということになるのであります』

次で徳政助役は其の足らざるところを敷衍して説明した。

『（前略）いろ〳〵御意見がございまして、結局防腐性を持たせるということ、それから橋台を大体八メートル位に埋める設計になつておりましたが、いさゝか浅い感じがするので実施調査をやつて、もう少し深める方がよろしい、それから橋台の間隔は同一間隔にしても外観的に何も影響はない、かえつて今後設計を行うにつきましても非常に都合がよかろう、それから一メートル橋台を上げるということでございますが、これは両側の橋のとりつきの所の道路が低うございますから、この点を勘案してよろしく上げることを考慮せられたがよかろう――中の二つの橋台を一メートル上げ

れば両側は一メートル上げなくても、これに準じて幾分か上げるようにしてやつたらいゝじやないかという意見がございました、それから更に高欄でございますが、これは今まで擬宝珠は丸いのをやつておりましたが、以前は角うなつておる、これも古式にのつとつてやる方がよろしいと、こういうような意見でございます』

次で議員白本龍氏より流失の原因について質問があつた、德政助役の之に對する答弁は、過日東京エーワン会館の会合でも出たことで、其原因たる激流が石台の石を浚つたにありとするも、何故に此の如き激流が近年に限つて生じたかということが、戦時中山地の森林濫伐、又錦川上流の發電ダムの決水、並に錦帶橋上下流のバラス濫掘採集に在りとすれば、これはいづれも戦時の国策が生んだものであるから、墜落の責任は国家に在る、隨つて復旧費の全額を国庫に於て負担し国は市に對して賠償の責任があるという理論の根拠となるから、墜落の原因を単に出水に依る寿命到来として軽視することは出来ないのである、德政助役の報告は

『その流失の原因のことにつきましては学会でも実は問題が出たのであります、（中略）一番大きな原因ともなろうものは川底のせいであります、要するに錦帶橋の上下の砂利を採取した、これが大きな原因ではないか、更に又ダムの問題――このダムの問題とそれから戦時中におけるところの木材の濫伐、或は脂根油を取るがために松の株を起した、そういうことがまず水流に非常な力を与えた、これが主な原因ではないかと思います、しかしこの土台が途中から崩れたか、或は根元から折れてそして崩れたかということは、現在あそこの崩れた土台をのけて見んことには、はつきり申し上げられない、まずまあ常識から考えて、このような点が申し上げられるのではないかと、かように申しておいたのであります』

一億五千万円全額国庫負担を以て政府に要求するならば、右の理由は最も強調すべきものであつた、次で議員沖宗助氏

れば両側は一メートル上げなくても、これに準じて幾分か上げるようにしてやつたらいゝじやないかという意見がございました、それから更に高欄でございますが、これは今まで擬宝珠は丸いのをやつておりましたが、以前は角うなつておる、これも古式にのつとつてやる方がよろしいと、こういうような意見でございます』

次で議員白本龍氏より流失の原因について質問があつた、德政助役の之に對する答弁は、過日東京エーワン会館の会合でも出たことで、其原因たる激流が石台の石を浚つたにありとするも、何故に此の如き激流が近年に限つて生じたかということが、戦時中山地の森林濫伐、又錦川上流の發電ダムの決水、並に錦帶橋上下流のバラス濫掘採集に在りとすれば、これはいづれも戦時の国策が生んだものであるから、墜落の責任は国家に在る、隨つて復旧費の全額を国庫に於て負担し国は市に對して賠償の責任があるという理論の根拠となるから、墜落の原因を単に出水に依る寿命到来として軽視することは出来ないのである、德政助役の報告は

『その流失の原因のことにつきましては学会でも実は問題が出たのであります、（中略）一番大きな原因ともなろうものは川底のせいであります、要するに錦帶橋の上下の砂利を採取した、これが大きな原因ではないか、更に又ダムの問題――このダムの問題とそれから戦時中におけるところの木材の濫伐、或は脂根油を取るがために松の株を起した、そういうことがまず水流に非常な力を与えた、これが主な原因ではないかと思います、しかしこの土台が途中から崩れたか、或は根元から折れてそして崩れたかということは、現在あそこの崩れた土台をのけて見んことには、はつきり申し上げられない、まずまあ常識から考えて、このような点が申し上げられるのではないかと、かように申しておいたのであります』

一億五千万円全額国庫負担を以て政府に要求するならば、右の理由は最も強調すべきものであつた、次で議員沖宗助氏

たんまり持つていたゞきたい、更に又後の金は県と市において負担する覚悟を持つておる――かように申しておいたのであります、もちろん只今の御質問に對しましても残りの二千万円に對しまして、文化財が持つということは、ほぼ決定しておる、こう云うような情報を得ておりますので、さすれば一千五百万円をどのように負担するか、県が一千万円持つか、或は市と半分々々に負担するか、これは県当局とも又交渉しなくてはならないと思います、更に又この財源につきましては、もちろん市と致しましても起債によつてやる考えであるのであります』

沖議員は重ねて質問した、此橋は果して六千六百万円で完全に復興工事が出来るかというのである、此の質問は頗る重要である、最初市は一億五千万円の予算を以て政府に全額国庫負担を要望したに係らず、今は六千六百万円といつて其の半額にも達しないから、不審の起るは当然である、中津井議長は其れは出来るから予算を組んで建設省の許可を取つたのだと答へ、沖議員再三の質問は遂に不要領の間に繰返されたに過ぎなかつた。

白本議員は之について質問した、国庫の負担四千六百万円は大体の話であるようだが、若しも是が出ないようになれば――二十五年度の災害復興として認めないということになるのではないかと思うが、建設省の方ははつきりして居るかと質問した。之に對し德政助役は左の如く答えた。

德政助役　災害の補助は二十五年度は国庫負担でやるという建前になつている、従つて二十五年度に行われる災害復旧の事業費は全部国庫が負担することになるから、錦帶橋に對する県人への割宛は四百万円ということになつております、今までの工事は年度内（三月三十一日）に行うべきを会計閉鎖の五月三十一日迄の期間を認められていたけれども、其れが改められて三月三十一日までに行うことになり、其れ迄に出上つたものゝみに對して全額国庫補助ということになると、二十六年度は勿論残りの四千二百万円ということになるが其れを来年度に於て全額交付してくれるか否かハツ

キリ国の方針が立つて居りませんが、建前は全額補助になつて居ります。

次で白本議員より、此工事は三月三十一日迄に行われるや否、又村重梅吉議員より錦帶橋流失の原因が県営発電ダムの開閉に因る、田中知事も之を認めて今後は開閉に注意するよう命令を出したと知事との問答を報告し、流失の原因が県に最責任があるから県に對しても全額負担を以て要望せよとの提議を為した。

次で中津井議長より流失の原因及び之を防止する為、橋台工事を近代技術を以てすることになつたと報告し流失の原因は橋台が崩れたにある、台の横に穴があいて水が入り中がすつとんとんになつた為で、或は砂利を取りすぎたゝめに崩れたのか、其れは別問題として、今度は台下を八メートル下げて鉄筋コンクリートで固めることになつているから崩落の原因は除去されている、此度びも昔のように石畳か漆喰程度のもので造るのならば、流失の原因をよく調べねばならぬが今度のは近代的の鉄橋を造ると同じ方法で、八メートルも九メートルも下に基礎を落して其上に立ち上らすのであるから、間に水も入らないし石垣が崩れるということはない、其の点は市民に於て納得の行くようにしたい云々

是れは中津井議長が度々上京して中央当局技術者の意見を聴き、其の確信に依る市議会を代表した証言と見て可い。

茲に於て秋本議員の發議に依り、来る二十二日（二月）を以て起工式を挙行するに決し、式に関する特別委員五名を挙げて他の議案に移つた。

十四、錦帶橋再建起工式の光景

昭和二十六年二月二十二日午前十時を期して錦帶橋復興起工式が挙行された、前夜来の風雨激しく此日如何んと気遣わ

れたが、天は起工式に幸いして朝来雨は歇み開式前より雲は散じて日光は笑みの顔を現わし諸事順調に行われた、岩国銀座街の打出す花火を合図に四方より集り来る参会者の群がり行く中を、小学校生徒の旗行列は萬歳歡呼の声湧立つ浪にゆられて街路を埋め、長蛇の陣を練つて錦河原へと指してゆく、今日より二百七十八年の六月一日は同じく洪水の災に因つて復興再建の其日であつたが、時代は異なれど吉川広嘉采配の下に、城下の民の賑々しかりしことなど思いやられた、参会者内外共に四百名、崩壊せる橋礎の周囲に集りて厳かに橋霊を慰め、花火数發の響は雨後の空を劈いて開式は告げられ先づ岩国市助役徳政繁生氏の開式の辭あり、引続いて岩国市長津田彌吉氏の式辭、同市議会議長中津井実氏の式辭ありて後、市長及び市会議長の手に依りて鍬入れ墨入れの古式がいとも厳粛に行われ、終つて左記参列諸氏の祝辭が静粛の中に朗読又は演説せられた。

増田建設大臣（代理）　高橋文部省文化財保護委員長（代理）　田中山口県知事　山口県会議長（代理）　山口県十市会議長代表　山口県教育委員長　国会議員代表衆議院議員受田新吉　毎日新聞社社長（代理）　国連軍代表ヱム、タブリユー、ジョンソン大佐等

次で各方面よりの祝電の披露あり、何れも此佳日を祝福する万意の数文字に溢るゝを聞く。

吉川重喜（吉川広嘉末裔、元子爵）。参議院議員重宗雄三。文学博士瀬川秀雄。山口市長山下太郎。宇部市長西田文治。参議院議員中川以良。衆議院議員青柳一郎。観光地選定会議長林譲治。広島県会議員中津井真。工学博士成瀬勝武。工学博士大熊喜邦。萩市議会事務局長。山口県東京事務局長高尾。日本交通公社高田寛。毎日新聞社新日本観光祭事務局。中国新聞社々長山本実一。中国新聞社山口県支社長態野英坤。新潟県道路課長。下枚市長。亀福旅館等

右終つて閉式を告げ一同打揃うて横山御城山麓の吉川家歴代霊廟の中、永久沈默せる吉川広嘉公の墓前に参拜焼香した

錦帶橋を創建して七年目の延宝七年八月十六日享年五十九才を以て逝去せられた其年より、茲に二百七十三年になる、碑碣苔蒸して千古の色蒼然たり、風林蕭々として呼べども返り給わず縷々として昇る香煙に神靈の生けるが如く浮ぶを仰ぎ見る、拜香者は四百の參会者のみならず市民の男女我れ先きにと爭いて墓前に満ち、公のありし日を思いて合掌瞑目する嗚呼岩国第三代の藩主と言わんよりも、日本の一大工業芸術家として、否な世界の一大芸術家として歴史的偉蹟を遺せる人傑崇敬の念が、今更のように勃然として發向した觀があつた。

其より岩国高等学校講堂に於て簡素なる立食の祝宴が開かれた、四百人の招宴処狹しと集り乾盃した、中には占領軍の将士も交つて前途を祝福してくれた、宴の開かるゝや津田市長起つて挨拶を述べ其中に

今後五百年千年、再び起工式を挙げるようなことは断じてありません、永劫不滅の名橋を造ることに全力を尽します

此の意気を以て三年計画であるが二年で完成する覚悟である。

と言簡なれども壯烈なる意気を揚げ会衆をして感奮興起せしめた、此簡勁な一言は、曩に錦河原の起工式祝辭者の中に占領軍代表のジョンソン大佐が「再び起工式を挙ぐることなきよう望む」という一大警告に感奮したものゝようである、次で田中山口県知事の萬歳三唱ありて散会を告げた。

猶此日はミス錦帶橋の松井重子、向田悦子、新井潤子の三嬢が登場し、放送局の実況録音、文化ニュース映画班、時事通信を始め各新聞社のカメラ班などの活躍も華々しく、市では別に放送座談会や起工式の実況を、永久に記念保有するために最新式のワイヤーレコーダーで録音し、劃期的な昭和二十六年二月二十二日の名橋を繞る出来事を、後代の子孫に伝えゆくことにした。

尚当日の式辭祝詞は其の言字の壯麗にして流失に屈せず復興意気の盛んなるを示す証左として、遠く千歳の後にまで響

応せしむるに足るものであるから、後代の人々は時の古今を問わず洋の東西を別たず、当代の士が如何に此名橋の保存に熱意であつたかを、深き感慨をを以て回顧せんことを冀うが為に左に之を存稿しておく。

式辞

岩国市長　津田彌吉

麗峯御城山の麓、清流錦川のほとり、国宝錦帯橋再建の起工式を挙行するにあたり、多数各位の御参会を辱うして、御挨拶申上げることは、寔に欣快に存ずる次第であります、旧藩主吉川広嘉公が二百八十年前独得の創案の下に建設せられました天下の名橋が、昨秋キジア台風による大洪水のため流失いたしましたことは、文化国家建設途上に於ける一大痛恨事でありました。岩国市民は打つて一丸となり再建の悲願をこめて起上り、全国の文化大衆の絶大なる御協力を得て、茲に原型復旧の願望が達成せられたのであります。本日より満二ケ年の予定を以て名橋は二百八十年前の姿そのままに再建せらるるのであります。まことに御同慶に堪えません、完成までには若干の苦難があることと存じますが、皆様の御べんたつと御支援を得まして、岩国市の責任に於て、此の世界的に貴き文化財たる錦帯橋の再建をなし遂げることを固く御誓い申上ます。

挨拶

岩国市議会議長　中津井實

本日茲に大臣初め来賓多数御臨席を賜り錦帯橋再建起工式を挙行するに当りまして御挨拶申述べる事は私の最も光栄とする処であります。

顧みますれば昨年九月西日本一帯に襲来したキジア台風は名橋錦帯橋を流失の惨に陥れ恐ろしい自然の猛威の前に吾々

は一時茫然たるのみでありましたが前後原型復旧の熱願は沸騰として興り再建運動は全県下に展開されると共に各界より之に寄せられたる絶大なる御協力は克く中央関係当局をして原型復旧支持の方向に推進致しまして目出度く本日を下し斯くも盛大に起工の式典を挙行するの運びに至りましたことは六万市民のこの上なき喜びとする処であります。これ偏に皆様方の絶大なる御協力御支援の賜であつた事を深く感謝致す次第であります。もとより本日のこの喜びの裏には言い知れぬ幾多の苦難のあつたことは忘れることが出来ません。尚今後に於きましても更に幾多の苦難が予想されますが、吾々が錦帯橋を原型復旧すると言う宿命的なものに似た熱願は必ずや結実する事を信じて疑いません。斯くある事こそ錦帯橋ゆかりの藩公の心に応える事ともなり敢て原型復旧の思想を固持した所以もこゝにあつたわけであります。この思想と由緒の結実は更に再建錦帯橋を包む周辺一帯の歴史と自然を摂入れた大観光地を設営し歴史と文化から生れ出ずる新しい思想育成に努めることこそ真に錦帯橋再建に副う大理想とも謂うべきであります。今吾々が大いなる感激の裡に二百七十七年前錦帯橋築営に成功された藩公の偉業をその儘に由緒の地に架橋の起工式をすゝめる今日この日在天の英霊降つて橋台の鎮めとなられるでありませう。

斯くして橋魂更に浮び悠久の流れに続く錦川の清流に錦帯橋の麗姿更に輝き映えるでありませう。いさゝか所信を御挨拶と致します。

祝　詞

建設大臣　増　田　甲　子　七

本日茲に錦帯橋災害復旧工事の起工式を挙行せらるゝに当り祝辭を述べる機会を得ましたことは私の最も喜びとする処であります。

抑々本橋は準用河川錦川を跨ぐ市道橋であつて全長二〇五米、五徑間の反橋は迫持式を応用した木造拱橋で世界に類例を見ない処であります。本橋創設は今を去る二百七十余年前岩国藩主吉川広嘉公の手になるものにして当時は渡船又は土橋で渡河してゐたものでありますが、錦川洪水に落橋屢々なる為苦心惨憺の結果茲に不落の橋梁を工夫せられたものでありまして爾来千年不崩壊の工法は創設当時より今次災害迄儼として洪水に打かつて来たのでありまして誠に驚嘆すべき処であり日本の誇りとするに足るものであります。

然るに偶々客年九月十四日キジア台風襲来するや錦川は既往に稀な大増水を来し地元民必死の努力にも拘らず遂に中央三徑間は流失の災禍に遭遇したものでありまして関係地元民の失望落膽は勿論文化日本の大なる損失でありました。今次災害復旧におきまして流失の原因を充分に精査し更に近代の技術を取入れ然も原形を損傷しない工法を採用し名橋錦帯橋の再現を期した次第であります。本橋竣工の曉は再び世界に誇る名橋として文化的に寄与すること極めて大なることを確信するものであります、冀くば絶大なる地元民の協力を得まして復旧の一日も速かならんことを切に祈るものであります。一言所感を述べて祝辭と致します。

祝　詞

文部省文化財保護委員会委員長　高　橋　誠一郎

本日錦帯橋修理起工式が挙行せられるに当り一言祝辭を述べる機会を得ましたことは私の深く喜びとするところであります。

錦帯橋はこゝに申し上げるまでもなく天下の三奇橋の一として建造技術と規模の雄大を誇る名橋であります、その変化に富んだ構造美が両岸の風光と相待つて天下の名勝をほしいまゝにして来たのも、まことに故なしとしないのでありま

す、しかるに不幸にして昨年九月キジア台風により三百年の歴史あるこの名橋が一朝にしてその美しい姿を消したことは、文化財保存上遺憾にたえないところでありまして、天災とはいえ痛恨の至りであります。

このたび県並に岩国市当局地元各位の熱心なる奔走と努力の結果、災後わずかに数ケ月にして早くも修理着手の運びとなりましたことは、文化財保護の上から慶賀に堪えない次第でありまして、関係各位の御熱意に深き尊敬と感謝とを禁じ得ません。

文化財保護委員会といたしましては関係各位のこの上の御協力によつて一日も速く錦川に美しい橋を再現することを衷心より祈る次第であります。

祝　詞

山口県知事　田　中　龍　夫

本日こゝに錦帯橋復旧工事の起工式を挙行せらるに当り一言祝辭を述べる機会を得ました事は私の最も欣快とする処であります。

顧りみますれに二百七十有余年の歴史を有する錦帯橋はその奇構と橋を囲む四方の風光の美しさと相待つて広く内外に宣伝され又国宝編入についても政府において既に内定の域に達していたと伝えられており更に昨年実施せられた日本観光地百選には堂々建造物の首位に入選する等愈々世界的名橋の名に恥ないまでに立至つたのでありますが過る二十五年九月県下を襲つたキジア台風による錦川未曾有の氾濫は遂に本橋の大部分を流失せしめる惨事を引起し県市民は勿論全国民に大きな衝撃を与えたのであります。

然し乍ら当岩国市におかれては早速期成同盟会を結成せられ市民一丸となつてあらゆる障害を排除し名橋の再建に邁進

せられました結果其の熱意は政府の認められる所となりこゝに原型復旧の工を起されるに至りましたことは文化的平和国家を標榜する我が国において当然のこととはいえ洵に御同慶に堪えない処であります。

更に錦帯橋を中心とする一帯の公園地や諸施設の整備は国際民間航空基地の指定と相俟つて愈々その前途は洋々として名実共に備つた新観光基地を実現するするものであると確信するものであります。何卒関係方面に於かれましては一層献身的な御努力をいたされ一日も早く錦帯橋としての使命と目的を達せられますよう念願して止まない次第であります

最後に本日の起工式の運びに至りましたまでの地元各位の御努力に対し衷心より敬意を表わしますと共に中央関係各省の御援助に対し深甚の謝意を表する次第であります。

一言所懐の一端を述べ祝辭といたします。

祝　辭

山口県会議長　清　水　為　吉

本日茲に錦帯橋再建の起工式を挙行せられることになりましたことは、私の最も欣快とするところであります、そもそも本橋は今から二百八十年前、吉川広嘉公の創案によつて建設せられたものであり、その奇巧精緻は天下に絶する名橋として古来より幾多詩歌にも詠われ、その独創は世界橋梁史上の驚異として内外の賞讃を博していたのであります。

然るに昨秋のキジア颱風の襲来による錦川未曾有の出水のため、遂に流失の惨事を惹起しましたことは、惜しみてもなお餘りあるところであります。

幸にして今回地元は勿論、関係方面の絶大なる熱意と御援助により、その基礎工事には近代的技術の粋を施し、しかも原形を失わない施設として恒久的文化財として建設せらるゝ運びとなりましたことは、誠に御同慶に堪えない次第であ

ります。

本橋の完成により地方文化の発展はもとより国際観光に寄与するところ大なるあるを確信致しまするが故に、再建途上にある邦家の為に、誠に慶びに堪えないところであります。

最後に私はこの有意義なる大事業達成に地元各位の絶大なる御協力をお願いして本日の祝辭と致します。

祝　辭

山口県十市市長会代表

春光訪れ、梅花馥郁と薫る本日の佳き日を卜してこゝに名橋錦帶橋の起工式を盛大に挙行せらるにあたりまして一言御祝辭を申し上げる機会を得ましたことは、誠に欣快に存ずる次第であります。

顧みまするに、延宝元年時の藩主吉川広嘉公の立案により設計架橋され、今日まで二百七十有餘年の間、その美と偉容を中外に誇つていました錦帶橋が昨年九月突如来襲しましたキジア颱風の被害によりまして、一瞬にして流失致しましたことは日本国民にとり一大痛恨事でありました。

然しながら、この惨事に直面された岩国市を始め、各方面の方々の御奮闘と御協力並に関係御当局の絶大なる御理解と御支援により、原型その儘の名橋が再び吾々の眼前に架設されるその起工の盛典を皆様と共に御祝い申上げ、その御苦労に対し衷心より敬意を表するものであります。

戦後日本が世界に表明しております平和国家、文化社会建設の象徴として、将又観光日本の偉大なる建築技術にこの名橋の再建こそ誠に時機に適したものと存じ、皆様方とともに竣工の一日も早からんことをお待ち致しておるものであります。

以上甚だ言葉は足りませんが一言蕪辭を述べまして、御祝の言葉と致します。

祝　辭

山口県教育委員会

梅花薫る早春の佳き日に当り名勝錦帶橋の再建起工が挙行せらるゝに当り一言祝辭を述べますことは私の最も光栄に存ずる所であります。

抑もこの錦帶橋は今から約二百七十年前名藩主吉川広嘉公が、当代技術の粋を集め苦心惨憺して架橋せられ、その後如何なる洪水にも流失することなく堅牢と奇橋とを以て日本三橋の一に謳われて居りましたが、昨年キジア颱風の暴威により一朝にして流失し痛惜の情に堪えず、天下の人々挙つてその復元を渇望し地元岩国市の復旧に対する熱意と国、県をはじめ各種団体の援助が渾然として結集し、半年ぶりに起工式挙行の運びとなりましたことは、文化財保護の立場からもまことに慶賀祝福に堪えない次第であります。

必ずや吉川広嘉公の遺志をついで蜿蜒たる虹の五橋が近代的土木工学の粋と風雅な日本建築の技術によつて再現せられ世界の名橋として内外観光の脚光を浴びることでありましよう。

最後にこの竣工の一日も早からんことをお祈りして祝辭と致します。

祝　辭

毎日新聞西部本社代表　藤原　勘治

二百七十年の歴史を水清き錦川に映じていました名橋岩国錦帶橋の麗姿が昨年九月惜しくも流失しました時、地元岩国

市民はもとより錦帶橋に親しみこれを愛しておりました全国の人々はひとしく驚きと愛惜の情を強く感じたのであります。この愛情は時を移さず「五連橋は今もわれ〳〵の心の中に生きている、世界に誇る錦帶橋をこのまゝにしてはならぬ」との燃え上る再建への決意となり、この決意は昨年日本観光地選定会議並に毎日新聞百選に顯現され、建造物の部に見事首位入選の栄譽を担われましたことは、慶びに堪えないところであります。

百選地入選を機に、錦帶橋再建の熱願は実を結び、本日再建起工式を挙げられることになりましたことは、全国民の慶びであるとゝもに、再建への地元県市民の並々ならぬ御努力のしからしむるところで、深く敬意を表します。遠からずして錦帶橋が再び世界の名橋として五連の麗容を現わし、新日本観光に寄与せられんことを、こいねがい再建起工の祝辭といたします。

祝　辭

国連軍代表　エム、ダブリユー、ジョンソン大佐

私は本日、此の目出度い錦帶橋の起工式に国連軍を代表して祝辭を述ぶる機会を得たることを喜ぶものであります、只今列席している私共の軍の者の中には、此橋が現存していた時、親しく其姿を見ていた者も居りますが、私自身としては、幼少の時に郷土アメリカにて学校の地理書の中て其図を見、其後もたび〳〵絵図や写真等で見たことはありますが未だ其の実物を見る機会を得なかつたのは、今更ながら甚遺憾に思つています、此橋は世界にも珍らしい建造であつて昨年のキジア台風の為に流失したことは何んと言つても惜しみても餘りあることであります、これが本日を以て再建せらるゝに至りましたことは誠に喜びに堪えないけれども、どうか此の名橋が百年は疎か、五百年も千年も動かず滅びざるものとなつて永久に保たれ、二度と再び起工式などを挙行する日のないように念願して止みません、是れが私共国連